

## 授業科目 言語障害検査法

特別支援教育講座 花熊 暁

受講者数 10名

### 1. 授業の目的

2007年4月より、全国のすべての小・中学校で特別支援教育の体制作り（校内委員会の設置と特別支援教育コーディネーターの配置）が完全実施され、また、2008年4月からは公立の幼稚園と高校においても支援体制作りが本格化している。特別支援教育においては、従来の特殊教育の対象児に加えて、通常の学級にいるLD、ADHD、高機能自閉症等の「知的な遅れのない発達障害」の児童生徒の支援が喫緊の課題とされ、特別支援教育の教員養成においても、これら発達障害の児童生徒の支援にあたる専門的な知識と技能を有する教員の養成が強く求められている。

通常の学級にいて学習や行動、対人関係や社会性に著しい困難を示す発達障害の児童生徒の支援にあたっては、詳細な心理教育的アセスメントによる認知特性の把握が不可欠であるが、中でも、WISC - 検査とK - ABC検査は、発達障害の児童生徒の認知特性を把握し、個に応じた教育支援プログラムを作成するための基本的検査とされている。

特別支援教育教員養成課程聴覚言語障害コース2回生10名を対象とする本授業は、WISC - 検査とK - ABC検査を実際的に学び、教育支援における検査の活用のしかたの基本を身につけ、3回生以降の授業で取り扱う実際的な指導・支援のベースとなる知識・技能を習得することを目的としている。本授業の到達目標は次の4点である。

- (1)アセスメントのあり方と検査の利用のしかたを述べることができる。
- (2)WISC - 検査とK - ABC検査の内容と検査方法を理解し、検査の目的と概要を説明できる。
- (3)検査結果の解釈から、子どもの認知発達特性を把握し、説明できる。
- (4)検査結果に表れた子どもの認知特性に基づいて、教育支援プログラムの基本方針を導き出せる。

授業は花熊・山下の2名で担当したが、本報告は、花熊が担当したWISC - 検査について行う。

### 2. 授業の内容と展開

WISC - 検査の学習にあたっては、受講者10名を3つの小グループに分けた演習的な学習形式をとり、実際に検査用具に触れて検査内容（検査の構成）を理解すること、学生どうして検査課題を実施しあうことで検査課題の達成に必要な諸能力について理解すること、発達障害児の実際の検査結果を題材に、結果の分析のしかたを学ぶこと、結果の分析から明らかになった子どもの特性に基づいて教育支援の基本方針を考えること、の4点に主眼をおいた。なお、到達目標(1)については、～の学習を進める中で、教員から適宜説明するようにした。

### 3. 授業評価アンケートとその結果

学生による授業評価は、(ア)WISC - 検査の内容理解に関するもの：3項目、(イ)授業の進め方に関するもの：3項目、(ウ)授業の目的と意義に関するもの：1項目、(エ)学生の自己評価に関するもの：1項目、の計8項目からなるアンケートを授業の終了時に実施した。8つの評価項目は5段階（項目5のみ2段階）で評価するようになっているが、(イ)の1項目と(エ)については、自由記述欄も設けた。

(ア)WISC - 検査の内容理解について

項目1「WISC - 検査について興味・関心が持てたか」については、「非常に」と答えた者が2名、「かなり」と答えた者が8名であった。

項目2「WISC - 検査の内容が理解できたか」については、「非常に」と答えた者が1名、「かなり」と答えた者が9名であった。

項目3「心理検査について今後さらに詳しく学んでみたいか」については、「非常に」と答えた者が2名、「かなり」と答えた者が8名であった。

アンケート結果に見られるように、10名全員が“かなり”以上の回答をしており、WISC - 検査についての基本的理解をはかるといふ授業の目的は一応達成できたと思われるが、授業担当教員としては、やや不満が残る結果でもあった。

“非常に”の回答が教員の期待ほど多くなかった原因としては、WISC - 検査の授業コマ数が7コマであるため、やや駆け足で授業を進めたことが考えられる。この点、発達障害の臨床でよく用いられる検査についてできるだけ幅広い経験と知識を持たせたいという願いと、1つの検査についてより深く学ばせたいという願いのバランス・兼ね合いが課題となるところである。

#### (イ) 授業の進め方について

項目4「小グループでの学習に主体的に参加できたか」については、“非常に”4名、“かなり”6名、項目5「授業の進め方や小グループでの学習方法は適切だったか」については、10名全員が“適切”としていた。また、項目6「教員の説明は適切だったか」については、“非常に”8名、“かなり”2名であった。

本授業の進め方については、昨年度の授業の反省を踏まえて、講義的な内容を少なくし、小グループによる実体験学習の時間を多くとったが、アンケート結果から見て、この点の改善は適切だったと思う。本授業のように、検査の内容と方法について学ぶ場合は、受講する学生が実体験を通じて主体的に学べるように授業を計画することの重要性を改めて感じた。

#### (ウ) 授業の目的と意義について

項目7「本授業は、通常の学級にいる発達障害の子どもたちと今後実際に接していく上で役立つ内容だったか」については、“非常に”と答えた者5名、“かなり”と答えた者5名で、教員を問わず学生にとって『実践的』という点での評価は高かった。教育実習だけでなく、1回生の段階から子どもたちとのふれあい体験を積み重ねている現在の2回生にとって、「子ども理解や子どもの支援に実際に役立つ実践的な知識・スキルの習得」は重要な課題であり、自由記述回答の中にも、「この授業の内容は、今後大切になる分野だと思う」という回答が複数あった。

#### (エ) 学生の自己評価について

授業評価アンケート末尾の項目8は、本授業における学生の自己評価を問うもので、授業の成績を100点満点で自己評価し、評価の理由を自由記述で記入してもらうようにした。学生の自己採点

結果は、70点：1名、75点：3名、80点：3名、85点：2名、90点：1名、であった。

本授業における学生の受講態度はきわめて良好で、小グループでの学習に主体的に取り組む姿が見られ、教員による評価では、全員が80点～88点の間にあった(もう一人の担当教員による評価も同様の採点範囲にある)。実際、自由記述回答でも、自己採点の肯定的理由として「授業に主体的に参加できた」との理由を挙げているものが多かった。

その一方、学生の中には、教員の評価よりも低い自己採点を行っている者が4名いる。自由記述の中で学生が挙げた「減点理由」を見ると、「家庭学習が少なかった」が多くあった。しかしながら、これは、学生の問題というよりも、授業外学習課題を明確に提示しなかった教員側の問題である。本授業は、心理検査の内容理解や実施方法に関するものであるため、授業外学習課題が提示しづらく、学生に与えた課題としては、WISC - 検査の基礎理解に関する小テスト(前回の学習内容が理解できているかどうかを、次の授業の冒頭に小テストを行って確認する方式)が中心であったが、「授業外でも学習したい」という受講学生の学習意欲に応える工夫が教員側に必要だったと思われる。

## 5. 授業の評価と課題

授業担当者としての自己チェックと授業評価アンケートの結果を合わせて、本授業では、授業の目的と到達目標は、ほぼ達成できたと考えている。ただ、本授業は、WISC - 検査それ自体の理解が中心であり、発達障害の臨床においてWISC - 検査を始めとする心理検査が活用できるようになるためには、事例を通じた検査結果の分析経験が数多く必要である。その点で、本授業で学習した内容は、本授業内だけで完結するものではなく、3回生以降に報告者が担当するより専門的な内容の授業(「重複、LD等の教育課程と指導法」、「言語・コミュニケーション発達論」)の内容とも結びつけていく必要がある。

次年度に向けての反省点、課題としては、前述した授業外での学習課題の設定がある。心理検査に関する学習では、心理検査の信頼性を損なわないために、検査課題の公開や検査用具の貸し出しを制限しなければならないという問題、また、事例検討では個人情報保護という制約があるが、こうした制約に抵触しないやり方で受講者の授業外の学習方法を考えていく必要がある。